

幼い頃の小さな忘れ物

奨励	堂腰 きみ子【どうこし・きみこ】
奨励者紹介	同志社幼稚園長

「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。あなたがたのだれが、パンを欲しがる自分の子供に、石を与えるだろうか。魚を欲しがるのに、蛇を与えるだろうか。このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして、あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない。だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である。」

(マタイによる福音書 七章七―二節)

小さなサインを見落とす

こんにちには、今日はお招きいただきましてありがとうございます。先ほど、園児たちが歌いましたように、同志社幼稚園ではたくさんの讃美歌を歌います。子どもたちは神様のお話を聞き、お祈りをしたり、讃美歌を歌ったりして、いつも空の上から神様が見守っていてくださるという思いのなかで、毎日礼拝を守っています。

幼児期における教育は、人格形成の基礎を培う重要なものであると言われています。人格形成の基礎を培うそのときに、私たちはどうしても見えるところに目がいつてしまっていて、子どもの小さな悲鳴や小さなサインを見落としていることがあります。これから人生を歩んでいくなかで、人と交わりながら自分が優しくされ、自分が愛されていることを経験した子どもは、同じようにそれを他者にも返していけます。私たちは常にその事を大切に思っています。

幼児期に大切なことは遊びです。遊びというのは、幼児期のなかでは学びです。その学びを生かすためには、たくさんのかを経験をなくてはなりません。その経験というのは、次から次へと目新しいことをするというではありません。子どもたちが経験して、「明日もしたいな」「今日はすごく楽しかったな」と子ども自身が感動を覚えたときに自分づくりをしていきます。自分づくりというのは、大人が介入したり、抑制したりするのではなく、子ども自身がこれをしたい、あれをしたいという夢をもち、希望をもち、それに向かっていくことです。そのために私たち大人は励ましたり援助し見守っていくことが必要です。しかし、そのようなことが、ついつい見失われてしまいがちで、この子はこの部分が弱い、この部分を早く直したい、などということが優先されます。そして子どもは集団生活のなかでは皆と同じでなければならぬと、親は思います。子育てのなかで、自分だけが置き去りなのではないかと心配して、ついつい隣を見て、またその隣も見て、他者と比較して同じようにできるよう、そこへ向かわせていくことに力を注がれますが、それは子どもの成長には必要のないことなのです。

子どもたちが卒園したあと、小・中学校・高校・大学・社会人という過程を歩んでいくなかで、その幼児期での大人の対応がどれくらい影響するかを考えています。幼稚園のなかで、病んでいる子ども、悲しんでいる子ども、悩んでいる子どもたちがいるなら、できる限り手を差し伸べ、責任をもって対応するようにしています。

先日、卒園生が出ている水泳の試合を見に行きました。選手のなかですばらしい泳ぎをしたその子は、中学三年生です。幼稚園のときを思い返してみると、その子どもはとてもマイペースでした。そして入園してから半年間くらい、お母さんから離れられなくて、後追いをしてしばらく泣いて、お弁当も食べられなくて、ずっと皆と同じ波に乗っていただけませんでした。しかし、他者をよく観察し、人の気持ちもよくわかっていました。水泳が大好きで小学校から続けていたのですが、あるとき、お母さんが受験をさせたいと言ってされました。子どもは、今日も水泳に行きたいと思っているのに「受験をするから塾に行きなさい」と言われる。プールに行くことを楽しみにしていた毎日の生活が、親の考えによって方向転換させられます。「水泳に行ってもいいけれど、塾にも行きなさい」、受験が近づいてくると「もう水泳はお休みしましょう」となります。そんななかで、子どもがどのようにして意思表示するかというのは、年齢が低いほど難しいです。そういうことで、その子どもは水泳の試合に出て、どんどん遅くなっていきました。そしてそののち、「お母さんは僕から一番大好きだったものを奪ってしまった」と、その子どもは違う方向に行ってしまうしました。

子育てでは、まず子どもと触れる、子どもの話に耳を貸す、子どもを愛する、子どもの気持ちを受け止めるというのが大事です。それができていないと子どもは、どんどん小さな落とし物をしていて、中学三年生になるころには、落とし物がどんどん積み重ねられていきます。そして、小さな落とし物が大きな落とし物になってしまいます。そういうことがないように、子どもが今、何を求めているかということと私たちが確認し、夢をもって、希望をもっていけるように子どもの気持ちをくみ取ることが大切なのです。

子どもの気持ちを受けとめる

先日、遠足に行ったとき、電車に乗っていて園児が好きな絵本の話をしていました。キャベツの帽子を頭に被って帽子がフーツと飛んでいくという話を、私も周りの子どもたちも一生懸命に聞いていました。「先生、それは今でいうカツラなんや」と言いました。そうしたら一人の男の子が「僕、桂（かつら）から来ている」と言いました。そのような場面で、親が「カツラというのは駅のことと違うよ、頭につけるこういうものよ」と否定して、正しいことを教えることが、幼児期には必要でないこともあります。「僕、桂に住んでいる」というのは、とても子どもらしい会話で、そこを笑って「桂から来ているの。今、言っているのは頭のカツラやけど、おなじ『かつら』やね」と言うと、わかっている子どもは笑いますし、「違う、違う、おかしいで」と指摘する子もいますし、わからない子どもはキョトンとしていますが、親子の会話のなかではそういう場面でも、ほのぼのの子どもの話を聞きたいものです。

「しゃぼん玉飛んだ、屋根まで飛んだ」と歌うと、「しゃぼん玉が屋根の上に飛んでいく」と理解する子もいれば、「屋根まで飛ぶの」と聞く子もいます。屋根までしゃぼん玉が飛んだのではなくて、しゃぼん玉と一緒に屋根も飛ぶと言うのです。そのことを「ああ、そうなんや、すてきやな」とそんなふうに聞きたいものです。こんなほのぼのしたことが、幼稚園の生活のなかではたくさんあり、そのたくさんある一つひとつのことを私たちは大切に受けとめています。子どもの言葉を絶対に否定しない、「そうやね」と同意する、これらの対話も大事なことです。子どもは自分の言葉に対して「それは違うよ」ではなく、「そうやね」という同意を求めています。

たとえば子ども同士でけんかをする。子どもはけんかをして育っていきます。やられたときには痛みがわかります。やった子は皆に「どうして叩くの」と責められます。けんかはやられた方がいつも泣き、やった方が「ごめんね」と謝るパターンではなく、けんかになる前はどのような状況だったのかと子どもと一緒に話しながら、何が正しいのか、何が間違っていたかを子どもに教えていく、ということです。やった子に「先に手を出したから、謝りなさい」、やられた子には「許してあげなさい」というような大人の見た目の仲裁というのは、子どもの世界では通用しないこともあります。子どもは謝ってほしいのかも知れない、でももし相手の子が「しまった」という顔をして涙を流しているのなら、「ごめんと言わなくても、その顔でこの子は精一杯ごめんと言っているんだな」ということをくみ取れる大人でありたいと思っています。

大人が拾うべき落とし物

先日、「人づくり二十一世紀委員会」があり、公立の中学校に行つて話をしてきました。

大人もいろいろな方がおられるので、子どもと向き合つて話すときに、髪の毛の色が茶髪だったり、ピアスをしていたり、いかにも態度が悪い生徒の外見を見ただけで「なんかおかしいのと違いますか」、「ちょっとあの子、だめですね」と、まず目に見えるところで評価をされることがあります。きっとこの生徒たちはそういう姿が見せられないのだなと私は感じています。そのときの話のテーマは、携帯電話の怖さでした。ある中学生は、「先生も親も、『携帯ばかり使つて、もう取りあげろよ』と同じことしか言わない」と言うのです。しかし家に帰つて「今日、学校でこんなことがあつたよ」とお母さんに報告しても、お母さんはメールをしていて、「ちょっと待つて」と言うのです。これは幼児期の子どもも同じ体験をしているのではないかと思います。

母親は一歳半の子育てに一番悩んでいるという統計があります。おっぱいをやりながら赤ちゃんに話しかけたり、お散歩に行つたときに「ああ、きれいな空やね。気持ちいいね」と、子どもの目線でゆつたりと話しかけると、赤ちゃんは話せなくても何かを感じています。最近、ほとんどのお母さんが、おっぱいを飲ませながら携帯電話でメールを打っているという現状を保健師さんから聞きました。子どもがお母さんに話しかけたとき、「ちょっと待つて。電話しているから、ちょっと待つてね」と返事します。「ちょっと待つて」と言われても、子どもは、お母さんに「今」言いたいのです。あとで「何だつた?」と聞いたときに、もう子どもの心はそこには向いていません。「何が言いたかつたの」と聞いたときに、子どもはもう話さない。そのように過ぎ去っていく。そのときに、一つの落とし物を、私たちのなかで持っているわけです。子どもが落としているのではなくて、私たちが拾つていかなければならない落とし物を忘れている。そして子どもは無邪気に遊んでいますが、実はその落とし物が一杯になったときに、子どもは爆発します。

ふれあいのなかで「感じる心」

中学生が、チャレンジ体験という職場体験をしていて、一番希望の多いのが幼稚園・保育園での体験だそうです。子どもは、外見がすごい恰好でもそんなことは関係ありません。「お兄ちゃん、お姉ちゃん、おはよう」「何して遊ぶの」と、中学生に寄つていきます。学校や家で孤立している子が、幼稚園の無邪気な園児とふれあうことによって、自分を求めている人がある、自分を待つている人があると感じます。職場体験したことで不登校が直つた中学生がいました。その生徒は、職場体験の初日には子どもとのコミュニケーションがとれず何となく様子がおかしいと思つていたら、「おなかが痛いので帰らせてください」と言うのです。そういう場合は、「帰つてもいいけど、ちょっと待つていて」と言つて、その生徒のこころを慕つて園児を呼んで、「お姉さんを誘つて、いっしょに遊んできて」と声掛けします。しばらく遊んでいるうちに、おなかは痛くなくなつています。子どもも、小学生も、中学生も、自分を認めてもらえなかつたら、ずっとそれを引きずっているのです。

ある中学生が幼稚園を訪ねてきたので話をしました。「クラスのなかで、僕はいじめられている」と言いました。「でもいじめている人は、本当はかわいそうなんだ。どこにも自分の気持ちをもつていけないから、僕に当たっているんだ」と言うのです。とても思いやりを持った発言に私は驚きました。相手を責めないで、「自分が盾になることで、その子の気が済むならいい」と言うのです。

人と人とのふれあいのなかで相手の気持ちを知るというのは、幼稚園や学校で教えるものではありません。優しさというのは、人に優しくされることで人にも優しくできるということです。いくら優しさを教えても、自分に優しくされた体験がない人には優しくできないし、言葉でやさしさを説明しても理解できないのです。

「なんで泣いてはるの」

そのようななかで、この幼児教育の現場で人に対するやさしさや思いやりを持つような人間として大きくなるためには、子どもたちに何ができるかということを考えます。先ほど歌った子どもたちは、歌を通して人びとにメッセージを投げかけています。毎日ががんばって練習したことを他の人びとに聴いてもらえる喜びを感じます。一生懸命に生きること、讃美すること、人びとに力を与えることがまず必要であります。十二月五日に、バプテスト病院にお招きをいただいています。二、三年前から伺っていますが、園児たちの力を少しでも分け合えたらということで始めました。会場の礼拝堂が満員になりました。園児たちが歌ったメッセージが観衆に届き、涙を流されたそのとき、園児たちにはその涙の意味が何であるかが何となくわかります。四歳児は「なんで泣いてはるの」と聞いてきますが、その聞いている人びとの涙に気づくのはすばらしいです。そして五歳児は、わかっているのか、何の涙かとは聞かないまま、拍手をもらって園児も感動しています。そして園児たちが順番に観衆と握手をして花を渡していくと、握手をする手を握って離されません。「もう一つ聞かせて」とアンコールをいただきます。アンコールの意味は、子どもにはわからないのですが、「また来てくれるか」と言われると「先生、何と答えたらいいの」と聞いてきます。園児たちは、「また来る」というお世辞が言えないのです。それでも、握手した手の温もりをしっかりと持ち帰っていきます。

先日、園児たちが『さとうきび畑』を歌いました。これは戦争の話の歌ですが、その歌詞とエピソードを子どもに話しますと、年長組の二、三人の子どもは涙を流しました。年少組の子どもは「お兄ちゃん、なんか泣いてはる。どうしはったん」「お姉ちゃんも泣いてはる。先生、見てきてあげて」と心配します。幼稚園の園児たちは、皆家族です。そして一人でも泣いている子がいたら、皆で「なんで泣いてはるのか聞いてあげようね」ということを実践しています。園児たちは、毎日の大人とのふれあいのなかで、人の温もりや優しさ、思いやり、感動を覚えながら育ちます。『さとうきび畑』の歌を歌いながら子どもたちが涙を流すのは、そういう感性が育っているのだと思います。人と出会い、コミュニケーションをとり、自分づくりをして、希望をもって毎日を歩んでいくなかで、幼稚園の三年間で培うものは大きな財産です。そのことを私たち大人も認め、子どもに寄り添いながら、子どもに向き合うことがとても大切なのです。

皆から愛される子どもとして育てる

幼い頃には小さな落とし物であっても、大きくなっていくと、とても大きな落とし物になります。子ども一人ひとりが無邪気な、すばらしい力をもっています。一人ひとり違っていると思います。友だちがいなくても、その子が存在するだけで幸せなのだとことをわかってあげてください。幼稚園から小学校に行き、中学校に行き、自分が友だちを求め、誰かを求め、愛してほしいと思った人に寄り添っていくときに、皆から愛される子どもとして育ててあげることが、私たちの大きな責任であると思います。

子育てのなかでは、触れる、見る、聴く、気づく、そして小さな忘れ物を見落とさないように、意識することが重要です。先日、子育ての専門家である先生が「子育てのあいうえお」という話をされました。そのなかで子育ての「あ」は、小さな命を「愛して」ください。「い」はつぶやく言葉を「意識して」ください。「う」は気持ちを「受け止めて」ください。否定するのではなく肯定して、気持ちを共に分かち合う。共感できるかどうかが子どもの成長を大きく左右すると思います。「え」は「笑顔を」大切に。「お」は、「お話」を一杯しまししょう、です。子育てをするときに私たちは迷い、周りに影響されますが、一生懸命に子どもに接することで、子どもは、自分が愛されているのだと感じます。

心を病んでいる大人、心を病んでいる子どもがいるなかで、幼い子どもと出会うときに、せめて私たちには何ができるのかということを考えます。一生懸命に愛情を注ぎ込んで、そして一緒に感動し、共感する、これが大事なことだと思っております。ご清聴ありがとうございました。

六つになった

一つのときは、なにもかもはじめてだった。
二つのときは、ぼくはまるっきりしんまいだった。
三つのとき、ぼくはやっとぼくになった。
四つのとき、ぼくはおおきくなりたかった。
五つのときには、なにからなにまでおもしろかった
今は六つで、ぼくはありったけおりこうです。
だから、いつまでも六つでいたいとぼくは思います。
(A・A・ミルン 作、周郷 博 訳)

二〇〇八年十一月五日 同志社スピリット・ウィーク
水曜チャペル・アワー「奨励」記録